

## 老人ホームなどでの対応

副会長 岡田 潔

介護施設に関しては、医師会の業務外なので、全数把握はしていない。私が担当医を務め、訪問診療と往診をしている有料老人ホームと小規模多機能施設で、クラスターが発生した事象について報告する。

2022年8月22日から25日に、定員45名（全個室）の介護付き有料老人ホームにて、介護職員が立て続けに5人COVID-19抗原陽性となった。当然のように入居者も8月22日から23日にかけて7人が陽性となった。入居者全員に当日または翌日のうちにラゲブリオ®（一般名：モルヌピラビル）を処方。当時は、まだ未経験の脱カプセルで投与した。周知のようにラゲブリオ®は非常に大きなカプセルなので、当然高齢者は嚥下することが困難である。しかし、当時はメーカーに問い合わせても、脱カプセル使用経験がなく推奨はできないとの回答であった。しかし時間はない、余裕もない、すぐに脱カプセルのゴーサインを出して、薬局に分包を指示した。5人の職員は、ラゲブリオ®等の抗ウイルス薬は投与せず、対症療法のみで経過観察とした。

入居者のうち1名、最高齢97歳の女性は8月23日の発症当日、ラゲブリオ®の内服開始前に、酸素飽和度が80%台まで低下、意識レベルも下がったため、PCCに保健所経由で入院を依頼、その日の夜に西新潟中央病院へ入院となった。彼女は時間はかかったが、10月に後方支援病院へ転院となった。それ以外の6名の入居者は、全員が施設で療養して、9月4日で療養解除となった。結果的に1人は入院となったものの、1人の死亡者も出さず、クラスターを乗り切

たことは奇跡的であった。

次に、小規模多機能型施設の話をしたと思う。個室9部屋、職員14人の小さな施設である。通い15人、宿泊9人と24時間の訪問サービスを行っている。こちらのほうが感染の拡大はきびしいものであった。2023年1月11日から15日の間に、まず14人の職員のうち10人が陽性となった。立て続けに利用者も7人が陽性、最高齢は90歳の女性であった。ここでも利用者全員にラゲブリオ®を処方。結果的には職員と利用者の全員が、1月21日に無事に療養解除となった。

この施設での出来事で、是非強調したいのが、陽性の職員のうち比較的若年齢の人で、軽症または症状がほとんどない人たちが、他の職員の負担を軽減するために、療養解除前に一部出勤して、陽性の利用者の世話をしていたことである。つまり陽性の人を陽性の人をみるという形である。限られた人数で宿泊者の介護を切れ目なく続けることが第一の目的であるが、もう一つの目的としては数少ない職員を、感染者から遠ざけ、感染拡大を防止するという意味もあった。もちろん、公の立場から言えば、行政としては容認する事はできない。しかし、現実的な対応として行政も黙認する形であった。陽性になった職員が陽性の利用者を介護する「陽々介護」という現実。クラスターが発生した高齢者「陽々介護」施設に対しては、全国的にも介護、医療ケアサービスへの支援が追いついていなかった。この「陽々介護」なくしては、当時の介護施設のクラスターに対する管理体制が破綻していただろうと感じている。

この特集号は、100年後に起こりうるであろう未知の感染症を想定して、COVID-19に対する我々の経験と教訓を語り継ぐことが目的である。しかし、このようなネガティブな体験を、闇に葬らず引き継ぐことも必要だと考えた。